カナダの航空機産業

年間売上げ＝28億ドル、8割は輸出

広大な国土に比較的少ない人口（約二千五百万人）が分散しているカナダでは、航空機は人々の生活に大きな係わりを持っている。民間航空機の保有数は約二万四千機で、アメリカに次いで世界二位を誇っている。

レジャー用、航空事業、社用等に使用されているこれらの航空機は、それをサポートするシステム、例えば多数の滑走路、航空支援装置、パイロットや整備士の養成機関等を必要とし、関連業界の仕事を生み出す。

航空宇宙産業の現況

カナダの航空宇宙産業は、航空機、エンジン、宇宙関連機器、航空機搭載用および地上局用アビオニクス等の研究・開発、生産、修理、整備など多方面の能力を持っている。

企業数約百社、売上げの九〇パーセントを五十五社で占め、一九八二年の総売上げは日本の航空宇宙産業とほぼ同じ二十八億ドル（約五千三百億円）。その七七パーセントが輸出である。総売上げの四二パーセントは機体部門、二八パーセントをエンジン部門が占めている。

総売上げの約一五パーセントが生産施設や機械への設備投資と研究開発に向けられている。この投資傾向は、今後も続くものと思われる。

現在、カナダはすでにいくつかの分野で最高の製品や技術を世界市場に提供している。例えば、ビジネス・ジェットのチャレンジャー、消防飛行艇ＣＬ－215、ＳＴＯＬ（短距離離着陸機）技術、スペース・シャトル用リモート・マニピュレーター、ガスタービン・エンジン、フライト・シミュレーターなどがあげられる。

カナダ政府は一九七四年に航空機メーカーの国有化を決定し、ゼネラル・ダイナミックス社（アメリカ）の子会社であったカナデア社と、ホーカー・シドレー・グループ（イギリス）の一員であったデハビランド・カナダ社を買収した。この国有化政策は、国家にとり極めて重要な航空機産業が、その製品の販路や新製品の開発の是非決定について、他国にある親会社の支配を受けるのは望ましくない、という考え方に基づいている。なお、両社とも一九八二年にカナダ開発投資公社（ＣＤＩＣ）に移管された。

カナダの主な航空機メーカーとエンジン・メーカーを紹介しよう。

カナデア社

カナデア社は、モントリオールにあるカナダ最大の機体メーカーで、その工場は世界で最も整った機体工場のひとつである。

一九四四年に設立されてから、五百八十機の超音速機を含め、軍用機、民間機を合わせ、約四千機の航空機を生産した。現在生産中の機種は、世界で最も進んだ長距離ビジネスジェットのチャレンジャー600型と601型、森林火災消火を目的に設計されたＣＬ－215多用途水陸両用機、それに一連の遠隔操作の無人偵察機である。

この他に、同社は航空機のコンポーネントの製造を他の航空機メーカーから受注している。ボーイング767の新型エアライナー、ロッキードのＣ－５Ｂ軍用輸送機、Ｐ－３Ｃ対潜哨戒機、ＣＰ－140オライオン哨戒機などの主要構造部分などがそれである。また、マクダネル・ダグラスＦ－15イーグル、Ｆ－18Ａホーネット、グラマンＥＦ－111Ａなど、戦闘機用の機械加工コンポーネントも生産している。

チャレンジャーは、一九八〇年代、九〇年代の多用途ビジネスジェット機市場向けに設計された高速長距離広胴機で、今まで市場に出ていた他のビジネスジェット機と較べ、優れた信頼性と整備性を持つ。また、かがまないで伸び伸びと機内を自由に歩きまわることができ、この機種では今まで可能でなかった居住性をも備えている。

大陸横断のチャレンジャー600型は、推力三千四百キログラムのアブコ・ライカミングＡＬＦ502Ｌエンジンを二基、海洋横断型の601型は、推力三千九百二十四キログラムのＧＥＣＦ34エンジンを二基搭載している。

チャレンジャーは、旅客・貨物機、救急機、海洋監視機、偵察・航空測量機、航法支援装置較正機としても優れている。

カナデア社はいくつかの研究プロジェクト・グループを持ち、例えば複合材料を使用しての耐久力のある部品の開発や、燃料効率の高い航空機の研究などに取り組んでいる。

チャレンジャーは、従来の翼の形状に比べて、はるかに効率が優れているうえに、軽量の新しい技術でつくられた主翼、バイパスバス比のターボファン・エンジン、広胴体の採用等、技術の粋を集めてまとめられたシステムである。

近代的なコンピュータ技術が、設計から製造までの工程で広く積極的に利用されており、全体を通じＣＡＤ／ＣＡＭプ